

中国の治水——神話の時代から——

坂井 多穂子（文学部）

要旨：古来、中国の河川はしばしば洪水を発生させたため、中国文明の繁栄には治水が不可欠であった。禹と李冰は中国文明を代表する治水師である。禹は治水の成功によって夏王朝の創始者となり、戦国時代の李冰は岷江に都江堰を建造して蜀郡を豊かな地域にした。彼らは治水の功績によって神格化され、治水の神となった。禹は天地創造の神話に登場する神となり、李冰父子は「二郎神」という道教の神となって『西遊記』や『封神演義』にも登場した。

現代中国における水の問題には、洪水や渇水だけではない。経済発展によって水質汚染が深刻化している。現代の二大治水プロジェクトは、三峡ダムと南水北調である。これらのプロジェクトによって解決できる問題は少なくないが、一方では建設地から移住させられた人々の貧困などの新たな問題も発生している。

キーワード：中国文明、神話、禹、李冰、都江堰

はじめに

中国文明は治水なくしては存続も発展もし得なかった。黄河を例に挙げると、肥沃な黄土平原は、黄河の周期的氾濫によって運ばれた土砂が堆積して形成されたものである。黄河は激流となって晋陝^{しんせん}峡谷を南に駆け抜けた後、山西省を縦断する汾河^{ふんが}の水を集め、さらには潼関^{とうかん}（今の陝西・山西・河南三省の省境近く）のあたりで陝西省を横断する渭水^{いすい}の水を合わせると、河道をほぼ垂直に変えて東流を始める。それとともに川幅は一気に広がり流れも緩やかになる。ここから海までの中・下流域こそが中華文明の揺籃となった。冬に結氷した黄河の水は、春になると、雪解け水を集めて増水し、緩んだ氷を砕きながら上流から大量に氷の山を運んで流れ下る。それが、中・下流域の川岸にぶつかり、護岸を削ってしばしば決壊した。また、流れが緩やかになる中・下流域は、上流から運ばれる大量の黄土が堆積して河床を上昇させ、増水時に堤防からあふれ出て激流となって流域に洪水被害をほしいままに拡大した。——上流から運ばれる大量の氷の山と黄土、これは大自然の摂理というに等しく、流域に暮らす人間の個々人が抗おうとして抗えるものではない。したがって、ここに居を構えた上古の人々にとっては、肥沃な大地と引き替えに、生命と生活を脅かす、最大にして不可避の宿命的脅威となったはずである。黄河という暴れ龍をどう手はずけ、どうコントロールしてゆくか、この重く大きな課題の解決が文明構築のすべての前提となり基礎となっていることを、まずここで確認しておきたい。歴史に証言を求めると、紀元前六五一年に戦国斉の桓公が葵丘（河南省考城）にて諸侯と締結¹した約束事の一つが、「堤防を勝手に曲げて他国を水攻めにしてはならない」であったのは、黄河の決壊が周辺に及ぼす甚大な影響を彼らが熟知し、文明を守るという叡智が彼らに備わって

いたからであろう。

そもそも文明とは何だろう。ある広範な地域で人口が増加すると、知識と技術を持つ専門集団が形成され、その知識と技術が結晶して普遍性を持って定着する。一個人の利益ばかりでなく共同体全体の利益に見合う技術や知識の体系が生み出され、それが更に多くの人々をその共同体に吸い寄せる。私見ではそれが文明である。そして文明は必ず、まずは農耕によって開始される。中国の氾濫危険区域で安定して農耕を続け、文明として結実するには、治水の知識と技術を持つ専門家の登場は不可欠であった。本稿では、中国文明における代表的な治水師、禹と李冰^{う りひょう}を取り上げ、古代の治水が如何なるものであったかを紹介する。禹も李冰ものちに水神（治水の神）として神格化されている。神話などから、彼らの治水が如何に人々に熱望され歓迎されたかを確認する。また、現代中国における二大治水工事を取り上げ、それらの工事の利点と問題点を述べたい。

1 禹の治水と水神

今から四千年以上前の中国で、水位が平常時より三十八メートルも上昇する大洪水が発生したという。当時の中原は、現代文学の巨匠魯迅が想像と諧謔をまじえつつ、

折しも「湯^{しょうしょう} 湯^{しょうしょう} タル洪水、マサニ割^{がい} ヲナシ、浩浩^{こうこう} トシテ山を懐^つミ、陵^{おか}ニ襄^{のぼ}ル」という時世であったが、舜さまの民草は、みながみな水面に露出した山の頂にひしめき合っていたわけではなく、木のとっぺんにくくりつけになるやら、筏に乗るやら、筏によってはちょっとした小屋掛けまでしてあるやら、岸から眺めるぶんには、すこぶる詩趣に富んでいた。²

と描いた通りのありさまであったろう。治水は為政者の必須要件であった。



【図1 禹】（インターネットサーチエンジン「百度百科」より）

禹（【図1】）は治水の功績によって、のちに夏王朝の創始者となった（「大禹治水」の舞台は漢代以降の文献では全国に広がり、黄河や越〔浙江省〕、岷江〔四川省〕、長江三峡〔四川と湖北の省境〕などの諸説がある）。もとは禹の父 鯀が工事をまかされ、「湮」（洪水を埋め塞ぐ）という方法を九年間続けたが、洪水は変わらず毎年発生した。鯀はその失敗によって羽山に流されて殺され、黄熊と化したと伝わる。子の禹は舜帝の命を受けて父の工事を継いだが、「湮」では洪水の原因を取り除くことはできないと判断したのであろう、「導」（疎通させる）、すなわち、「高きを高め、下きを下め、川を疏し滞を導く」³という手法を採用した。禹は刻苦して屋外で十三年間治水工事を続け、その間、自宅の前を通りがかっても一度として門をくぐらなかった。その結果、河川は滞ることなく海に導かれ、堤防の決壊は止まった。舜帝は「我が天下は、汝の功績によってうまく治められたのだ」と感嘆し、禹に帝位を譲ったという。

禹は会稽山（浙江省紹興）で封禪の儀をおこない⁴、諸侯に面会して神々を祀った。塗山氏を娶ったのも当地である。よって紹興が禹の活動の拠点だとする説がある。その説によれば、家に帰らずに治水工事に熱中した川は黄河ではなく、紹興近郊を流れる 剡溪⁵であるという。



【図2 大禹陵】（インターネットサーチエンジン「百度百科」より）

禹の陵墓「大禹陵」（【図2】）は、会稽山の麓に建っている。禹の死後、秦の始皇帝がまず会稽山で禹を祀り、南朝梁代に初めて禹廟が建てられ、修築をかさねて現在の広大な陵墓となった。禹を祀る建造物は中国全土にみられる。なかでも長江のほとりの忠州臨江県（重慶市）の禹廟には唐の杜甫や南宋の 陸游⁶が訪れて詩を作ったことで知られる。黄河のほとり 開封⁷の禹王大公園には、巨大な禹像がそびえる。さらに、禹王の功績を称えた禹王碑は全国に百三十二を数える⁸が、その原碑とされる石碑は千年前に行方知れずとなっていた。二〇〇七年、湖南省衡山県の農家の壁からその原碑が発見・確認されたという衝撃的なニュースは耳目に新しい。

ちなみに、禹の威光は我が国をも覆っている。関西では京都の鴨川や淀川、関東では酒匂川（神奈川県）や利根川等々の要所に、禹を祭った社や石碑が江戸時代を中心に建立されていたという⁶。

廟や石碑だけでなく、文献のなかに禹の治水にまつわる伝説や神話は事欠かない。禹は黄熊^{すっぽん}に化して自らの口と爪とで九河を通したとか、无支祁^{むしき}という水の妖怪を捕らえて亀山のふもとに鎮めたとか、はたまた禹は虫であったという話までである。ここからは、治水にまつわる神話のなかでも代表的な水神——女媧^{じょか}そして樸父夫婦^{ぼくふ}——を紹介しよう。

（一）女媧



【図3 伏羲と女媧】（東漢武梁祠石室画像）

顓頊^{せんぎよく}との帝位争いに負けた共工が怒って暴れたため、天柱が折れて天は西北に傾き、地維が絶たれて地は東南に落ち込み、洪水が発生した。破壊された世界を救ったのが女媧である。女媧は人頭蛇身の姿をもち、夫の伏羲^{ふつき}と共に、人類創造の神としても知られる。【図3】の、左向きでコンパスを手をしているのが女媧で、右向きで定規を持つのが伏羲である。女媧の天地修復のくだりは、前漢・劉安^{えなんじ}の著『淮南子』のなかに次のように記されている。

いにしえの時、天を支える四極の柱が傾き、九州の大地が裂けた。天は地を覆い尽くすことができず、地は万物を載せることができず、火は燃え広がって消えず、洪水は広がってやまなかった。猛獣は民を食らい、猛禽は老弱に掴みかかった。そこで女媧は五色の石を使って天の破れを繕い、大亀の足を断ち切って（それをを用いて）四極を立て直し、黒龍を殺して冀州を救い、蘆灰を積んで陰水を止めた。⁷

女媧はまず五色の石を用いて天の綻びを繕い、大亀から切り取った四つ足で天を支え、雷神の黒龍を殺した。そして蘆を焼いた灰で洪水を埋めた。女媧は、（鯀と同じ）「湮」によって洪水を止めた。共工の破壊行為による一次性洪水であるため、埋めふさぐ方法で修復できたのであろう。

（二）樸父夫婦

樸父夫婦は一对の巨人の男女で、最初に黄河を開いたが、いい加減な仕事ぶりであった。『神異経』は前漢の東方朔に仮託された書であるが、その中に樸父夫婦にまつわる伝説二種が収められている。

以下に全文を挙げる。

東南の果ての中に樸父がいる。夫婦ともに背の高さが千里、腹周りも背丈と同じぐらいある。天がそもそも二人をここに立たせたのは、天はこの夫婦に百川を切り開いて流れさせようとしたところ、彼らは怠けて真剣に行わなかったので、罰として追放して東南に並び立たせたのである。夫も妻も、性器をあらわにした格好で、何も飲まず何も食わず、寒さも暑さもかまわず、ただ天の露だけを飲んでいる。濁った黄河が澄む時でもきたら、また彼ら夫婦に百川を通じて守らせることになるのだろう。

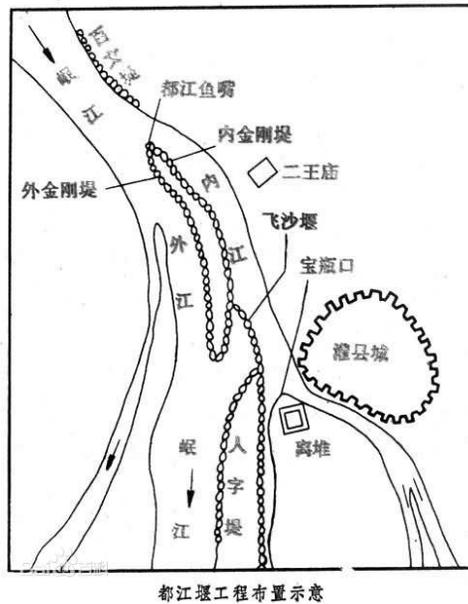
昔、天帝が立ったばかりの時、この二人に黄河を開かせたが、ある場所は深くある場所は浅く、またある場所は狭くある場所は塞がっていた。そこで禹は何度も治水工事をおこない、水の流れをよくした。天帝は樸父夫婦を責めて互いに寄りかかって立たせ、黄河の水が澄むのを待つかのようであった。そして黄河と海の間に分水路を作ると、黄河の水はおのずと澄んだ。⁸

彼らは天帝に「百川を開く」よう命ぜられるも、怠惰で仕事が雑だったため、川の深さも広さもまちまちで容易に溢れた。天帝は彼らを責めて立たせ、黄河が澄むのを待って工事を再開することにした（あるいは禹の治水を経て黄河の水が澄んだ）。樸父のこの神話には、さんざん洪水に苦しめられてきた古代人の辟易した気持ちや、「天地開闢の神がいい加減だったのだから仕方ない」という諦念が表れている。

本節で取り上げたこれらの神話からは、古代中国の人々が洪水に苦しめられ、治水による河川の安定化が熱望されていたこと、そして、禹の治水の成功が中華文明の幕開けとして位置づけられてきたことを確認できる。とはいえ、禹の治水の遺跡は現存しないため、各書に断片的に残る記述から想像するしかない。次節では、現存する最古の治水の遺跡——都江堰^{とこうえん}——を取り上げ、李冰の叡智と技術を確認しよう。

2 都江堰と「二郎神」伝説

現存する最古の治水の遺跡は、紀元前二五六年頃、戦国時代秦の蜀郡太守・李冰が築いた都江堰（江水を都^すべる堰^{せき}の意）である。長江上流の支流の一つ岷江^{びんこう}は、雪解けの時期には山岳部から成都平原の扇状地に出てきた辺りで増水し、ほぼ毎年洪水を起こした。李冰は秦の孝文王によって蜀（四川省）の太守に任ぜられると、秦王から与えられた銀十萬両と八年の歳月をかけて、息子の李二郎と共に都江堰を完成させた。



【図4 都江堰】(インターネットサーチエンジン「百度百科」より)

都江堰は【図4】のような構造である。李冰はダムや堤防を作るのではなく、川の中に中州を造って流れを二分し、外江（本流）と内江（農業用）とに分けた。その際、外江は幅を広く（百五十メートル）かつ浅く、内江は幅を狭く（百三十メートル）かつ深くした。特に重要なポイントは、中州の先端にある分水のための「魚嘴」、内流に溜まった土砂を排出する「飛沙堰」、内江の水を農業用水へと導く「宝瓶口」の三箇所である。これらによって、乾季には「魚嘴」が水流の六割を内江に導いて人々の生活用水とし、雨季には「魚嘴」の先端を水が乗り越えて六割が外江へと流れるため、氾濫を起こすことがなくなった。この仕組みは外江と内江の水量を常に四対六に配分するため、「四六分水」と呼ばれる。都江堰は、建造から二千三百年経た現在も機能しており、二〇〇〇年にはユネスコの世界文化遺産に登録された。四川省の古名を「天府之国（肥沃な国）」というが、その豊かさはまさにこの都江堰によってもたらされたのである。

李冰父子は神格化され、治水の神として祀られた。都江堰の内江の東岸にある「二王廟」は、李冰と子の李二郎の功績と徳を称えて五世紀末（六朝の斉朝）に建てられたものである。当初は「崇徳廟」という名であったが、しばしば改称された。現在の名称（「二王廟」）は、宋代に李冰父子が「王」に追封されたことによる。清朝の乾隆年間には「二郎廟」と呼ばれていた。李二郎は中国の「二郎神」伝説のルーツとされている。



【図5 二郎神】（『新説西遊記図像』より）

二郎神は道教における治水の神である。ほかに「灌江二郎」など多くの名を持ち、正式名は「顕聖二郎真神」という。唐代の詞牌（楽曲名）に「二郎神」があり、唐代には二郎神伝説が存在していたと考えられている。二郎神のつかさどる内容は多岐にわたる。治水や医療のみならず、子宝を授け、また子供を守り、さらには妓女や蹴球、戯劇をなりわいとする者の守り神ともされる。蜀では二郎神を「川守」（四川の守り神）として祀っている。容貌は、額に第三の目が縦向きについた白皙の少年として描かれている。二郎神が登場する小説も少なくない。たとえば明代成立の『西遊記』第六回に登場する楊二郎は、玉帝の甥で、「顕聖二郎真君」という名の三ツ目の美男子（【図5】）で、しかも水を司る。まさに治水の神、二郎神である。同じく明代に成立した『封神演義』にも、同様の風貌と術を持つ「二郎神」が登場する。

李冰父子の業績に対して、中国士大夫はどのような思いを持っていたのか。今から八百年以上前の南宋四大家の一人、范成大（はんせいだい一一二六～九三）の文章を紹介しよう。范成大は四川安撫制置使をつとめていたが、淳熙四年（一一七七）、職を辞して帰京した。蜀から郷里蘇州までの船旅を記録した紀行文『吳船録』には、長旅の出発直前に郷里の方向とは正反対の「崇徳廟」（二王廟）にわざわざ出向いたことが記されている。

范成大は五月二十九日に成都を発ち、妻子には先に船で岷江を彭州まで下って宿泊させ、みずからは馬で成都の北方の秦岷山の道を行った。そして永康軍（現 都江堰市）や青城山をまわってから南下し、彭州で家族と合流した。永康軍では離堆（都江堰のそばの山）と崇徳廟を訪れた。その部分を、少し長い以下に引用する。

庚午（二日）。二十里、朝のうちに安徳鎮で休憩。永康軍につく。この間、長江の水が多く掘割に流れ込んで、雷の如くとどろき、また雲とさか捲いていて、見わたす限り肥沃な田がつづく。いわゆる「岷山の下の方野」とは正にここのことである。崇徳廟は軍城の正門外の山上に在る。秦の太守李冰父子をまつる。

辛未（三日）。城の西門の楼上に登る。岷江は真下である。山間を流れてきた江が、ここで初めて広がる。江の向いはちょうど岷山であるが、一番近いのを青城山といい、最も大きなのを大面山という。大面山のかなたはすべて西戎（西域）の山々になるわけである。西門は玉壘関と名づけられる。…（中略）…それから懐古亭に登って離堆を見おろした。離堆というのはむかし李冰が山崖を切りとおして長江の分流をこしらえ、永康をへて彭州・蜀州にゆき、また支流が郫県から成都にゆくようにした処である。亭の対岸の崖には伏龍観という道教の寺がある。李冰は悪業の龍を離堆の下に封じこめたとの伝説があるので、観に孫太古のえがいた李氏父子の像がある。

玉壘関の城門を出て、山に登り崇徳廟にもうでる。新築の廟の正門は二階づくり、宏壮で大江を見おろしている。名は都江。長江の源は実は西域に発するのであって、岷江の谷間を過ぎてここに落ち合うから、都江の名があるのだが、世に「江は岷山より出づ」というのは、中国からそのように見えるからの話なのである。李冰は長江の開鑿や悪龍の退治と、西蜀には大功のあるひとであるから、その祭礼は非常に盛んで、毎年そのために殺す羊は五万もあり、供物にしようと羊を一匹買っておくうちにたまたま仔を産んだ場合、やはり仔を残すことはしないでいっしょに屠ってお供えにするそうである。廟の前には羊殺しの店が何十何百軒とならび、永康軍の収入はもっぱら屠羊の税に仰ぐというほどで、屠殺の盛んなこと実にはなほだしいものがある。私が諷刺を寓した詩を作って石に彫らせたのも、万一神霊がこれを聞いてあわれみの情を動かされることであろうかとの望みをこめたつもりである。

廟の前、離堆の近くには石ころを積み上げ長汀を作って水を防ぐ。象鼻と呼ぶのは形が似ているためであろう。西川（四川西部）の地方で、ひでりのために支江（長江の支流）の水が涸れることがあると、使者を立ててこの廟に祈祷をささげたいえ、堰をふやして水を止め支江の方に流すようにする。三、四晩もすると、すっかり用水がゆきわたるようになる、これを「摂水」と呼ぶ。私の成都在任中にも、連年郡丞（属官）の馮備を遣って廟の下で「摂水」させたが、いつも予期の如く効果があり、豊年がつづいたことであった。廟に詣でお礼を申したのち、三樓を見まわって帰途につく。⁹

范成大は、成都出発から四日目の六月二日に永康軍に到着し、翌日、都江堰と崇徳廟を訪れた。崇徳廟の門前には、供物の羊を屠る店が何百と軒を並べ、たいへん繁盛していた。「長江の開鑿や悪龍の退治」をおこなった李冰父子に対する、南宋の蜀地の人々の深い信心がうかがえる（この時、范成大は「離堆行」という諷刺詩を作り、供物として屠られる大量の羊を憐れんだほどである）。さらに、

范成大は、都江堰の「摂水」のおかげで、在任中の四川が豊作続きであったことについて、廟でお礼を申し述べる。彼がわざわざ家族とは別行動をとって岷江の上流の永康を訪れたのは、李冰へのお礼参りのためであった。農事にはしかるべき時に水を得ることが必須である。都江堰のおかげで、四川は旱魃の影響を受けることなく「天府之国」でありつづけることができた。范成大は、在任中には部下を廟に遣わして祈祷させていたが、任地を離れるに当たってみずから足を運び、為政者としての立場から李冰に謝意を表したのである。

この時、范成大は「崇徳廟」詩（全十六句）を書いた。その冒頭に次のようにうたう。

雪山南風融雪汁	雪山 南風 融雪の汁
化作岷江江水來	化して岷江江水と作りて來たる
不知新漲高幾畫	知らず 新たに漲りて 高さ幾画なるかを
但覺樓前奔萬雷	但だ覺ゆ 樓前 万雷奔るを

「雪山を南風が融かした雪水が、岷江の水となって流れて下ってきた。水位はいったいどこまで上がったのだろう。この廟の前を万雷が轟き駆けぬけてゆくを感じるばかりだ」。なお、第三句には、「昔、離堆の崖には水位を測定する目盛が刻まれており、水位の上がり具合で歳事を占った」という范成達の自注が付されている。自注に言うとおりに、水量は歳事（一年の農事）を左右する。すでに四川安撫制置使を辞したにもかかわらず、范成達はまだ岷江の水量を気にかけているのである。

古代の治水師の叡智はその後、どのように継承されているのか、その全貌をくまなく辿ることは紙数の都合上、不可能である。河川は氾濫や渇水によって何度も流路を変え、そのたびに人々の生活に影響を及ぼしてきた。また、同じ河川でも上流と下流では地質や水量、そして水質も異なるため、抱える問題も異なっている。次節では現代における代表的な治水プロジェクトを取り上げ、そこに潜む問題に言及したい。

3 現代の治水プロジェクト

「白日 山に依りて尽き、黄河 海に入りて流る」——太陽は山に寄り添って沈み、黄河は海に向かって流れる——これは、唐代の王之渙おうしかんの名作「鶴鵲樓かんじやくろうに登る」詩の冒頭である。海に向かって流れる、と千三百年前に詠われた黄河は、二十世紀末には時折、海に流れ込まなくなった。なかでも一九九七年には、黄河の水が半年以上、渤海に流入しない大規模な「断流」が発生したのである。

かつては豊富な水量で大地を潤してきた黄河であるが、近年における水量の減少は深刻であり、その主因として工業用水の需要や上流のダム建設が指摘されている¹⁰。そもそも、「南船北馬」という言葉があるように、河川が網目状に張り巡らされた南方に対して、北方は河川が少なく、乾燥地帯が広がっている。先秦以来つづいてきた森林伐採によって、黄土高原の森林被覆率は六十パーセント超

からわずか六パーセントにまで減少している。北方は全国のわずか十五パーセントの水量によって、全国の人口の約半分を支えねばならず、一人あたりの水量はきわめて乏しい。

とはいえ、水の問題は北方だけのものではない。洪水や断流、また水質汚染の問題は全国的に発生している。たとえば、高速鉄道が全国に張り巡らされる過程で南方の多くの河川が地下化され、水質汚染を引き起こした。また、かつて黄海にそそいでいた淮河はしばしば流路を変え、南宋以降海には入らず、現在は長江に合流しているのだが、工場廃水の影響で近年の水質汚染は甚だしい。流域住民の高い発癌率はそれが原因だと言われている。

本節では、現代中国における二大治水プロジェクトを取り上げたい。すなわち、三峡ダムと「南水北調」である。

(一) 三峡ダム

三峡ダムは、長江の三峡の一つである西陵峡（湖北省宜昌）に作られた世界最大のダムである。建設の目的は、洪水抑制や電力供給、そして水運の改善であった。本ダム建設の構想は、第一次大戦後に孫文が発表したとされる。建国後に調査が開始され、一九九四年に着工、二〇〇六年に完成した。三峡ダム建設の利点は次のようなものがある。①水量調節が可能となったために、洪水の発生を抑えられるようになった。②二酸化炭素を排出することなく、膨大な電力を供給できるようになった。③水位の上昇によって難所が無くなり、大型船の運航が可能になった。④近くの漢江には「南水北調」の中央線が接続しており、三峡ダムに蓄えられた大量の水を北方に送るのに都合が良い。⑤建設当初は三峡の大半の遺跡の水没が危ぶまれていたが、多くの遺跡が水没を免れ、三峡ダムは「長江三峡新景観ベスト30」の一つに選出された。

問題点としては、①住民百数十万人の強制移住が未解決であること、②ダムの水圧による地盤の破壊、③污水处理が追いつかないことによる水質汚染、④自然破壊による気候への影響、⑤二〇一九年にはグーグルアースの写真にダムの歪みが認められ、当局が否定する騒動となり、ダムの持久性が疑問視されていること、などがある。

(二) 南水北調



【図6 南水北調工程路線図】(インターネットサーチエンジン「百度百科」より)

「南水北調」は、北方の慢性的水不足を解消するために、水源豊かな南方の水を北へ調達するという、毛沢東が一九五二年に打ち出したプロジェクトである。五十年間の検討を経て二〇〇二年に着工した。【図6】のように、長江の上流（通天河等）・中流（支流の漢江）・下流（揚州）の三箇所取水し、それぞれ西線・中央線・東線という輸水路を通して西北部と華北部に水を運ぶ。三本の輸水路の長さは計四三五〇キロメートルに及ぶ予定である。東線と中央線はすでに開通し、取水を行っているが、上流の西線は地形の特殊性によって工事が難しく、二〇二〇年一月の時点では着工に至っていない。

利点としては、①長江下流は水量が多いため、大量の水を取水できること、②東線や中央線においては、既存の河川や湖を輸水路に利用できるため、工事コストが抑えられたこと、などが挙げられる。

いっぽう、問題点は少なくなく、すでに指摘されているだけでも次のようなものがある。①取水量が少ない場合、本プロジェクトに要した莫大な経費に見合う経済効果が得られるのか疑わしい。②渇水期の長江から大量に取水すると、長江での航行に影響が生じる懸念がある。③水質にも問題があり、とくに下流の水は汚染されているため、華北の人々の生活用水として供給することを危惧する声がある。④数十万に及ぶ移民が十分なケアを受けられず、移住先で貧困にあえいでいる。

これらの現代の治水建造物の評価が定まるのは、当分、先のことである。禹や李冰のように神格化される日がやってくるかは、まだ誰にも分からない。

おわりに



【図7 頤和園「金牛銘」】（インターネットサーチエンジン「百度百科」より）

中国では、水辺にしばしば銅牛や鉄牛が置かれているのを目にする。牛は五行では「土」に当たり、「土は水に克つ」とされることから、牛は水害を防ぐと見なされているが、どうやら理由はそれだけではない。北京の頤和園の昆明湖の東岸に寝そべる銅牛（【図7】）の背には、「金牛銘」という

題の四言の銘文八十字が刻まれ、その冒頭に「夏禹治河」とある。つまり、これらの銅牛や鉄牛は、禹が整備した場所に鉄牛を作って沈めたという民間伝説のなごりであるとも考えられるのだ。古い神話からはこの伝説の所在を確認することはできないが、前漢の揚雄の著作とされる『蜀王本紀』には、

江が水害を起こしたが、蜀の太守である李冰が石の犀を五つ作り、二つを府中に、一つを市中の橋の下に、二つを水の中に置いて、水の精を鎮めた。よって「石犀里」という。

という記述がある。『蜀王本紀』は近年、考古学における史料価値が見直されつつある文献であるから、李冰が石犀を五つ作ったというのはあながち嘘ではないかもしれない。銅牛は、犀を、中国人になじみ深い「牛」に置き替えて広まったものかもしれない。だとすると、水辺に置かれる銅牛や鉄牛は、禹と李冰にまつわる伝説が合わさったものであり、二人の水神に対する民間の信仰が現代の我々の目の前に具現化されたものでもあるといえよう。

¹ いわゆる「葵丘の会盟」である。『孟子』「告子下」に、「五覇、桓公為盛。葵丘之會、諸侯束牲載書而不歃血。（中略）五命曰、『無曲防、無遏籩、無有封而不告。』」という。

² 木山英雄訳『故事新編』「理水」（『魯迅全集3 野草・朝花夕拾・故事新編』立間祥介ら訳、学習研究社、一九八五年）による。

³ 『国語』「周語下」

⁴ 『史記』「封禪書」に、「禹封泰山、禪会稽」という。

⁵ 植村義博著『禹王と治水の地域史』（古今書院、二〇一九年）

⁶ 大脇良夫「禹王の足跡を巡る旅」（『水の文化』四〇号、ミツカン水の文化センター、二〇一二年二月）等。

⁷ 『淮南子』「覽冥訓」

⁸ 『神異経』「東南荒経」。なお、訳文は前半部分のみ、竹田晃氏らの訳（『中国古典小説選1 穆天子伝・漢武故事・神異経・山海経他<漢・魏>』明治書院、二〇〇七年）を使用した。

⁹ 范成大著、小川環樹訳『吳船録』卷上（『吳船録・攬轡録・駉鸞録』平凡社東洋文庫、二〇〇一年）

¹⁰ 本節執筆に当たっては、小林善文『中国の環境政策<南水北調>水危機を克服できるのか』（昭和堂、二〇一四年）、芦田和男ら編『生命体「黄河」の再生』（京都大学学術出版会、二〇一一年）、高橋裕『長江水利史』（古今書院、一九九二年）等を参照した。